



鶏種特性に合わせた 飼料の見直しにより 良好な成績を生み出す

今回は、大規模集約化が進むブロイラー業界において、西日本地区に根づいて独自の販売網をつくる生産者の事例である。飼料会社とともに取り組んだ成績改善の様子を紹介したい。

飼料への抗コ剤添加を検討

性能が急速に向上するブロイラーでは、常に最高の性能を引き出すことはとても難しい。出荷までの日数が50日を切るほど短くなった現在、たった1日でもその意味は重い。

取り組みのきっかけは、大産地である東北や九州の成績が向上するなか、自社農場の成績が思うように上がらないことだった。相場依存ではなく生産性を上げ、足腰の強い農場経営をめざす必要があった。

まず検討したのは飼料への抗コクシジウム剤（抗コ剤）の添加だ。一部

の農場でコクシジウムの被害を抑えきれずコクシジウムワクチンを使用して以来、以前のように抗コ剤は使われなくなった。しかし、飼料会社の協力で他産地のデータを収集すると、抗コ剤を使う農場と使わない農場との成績の差が、大きくなる場合が一部にあった。

抗コ剤には、コクシジウムを抑える作用以外に成長促進作用があり、最近のブロイラーではこの作用がとても大きい可能性があった。しかし、抗コ剤を使うと生ワクチンの効果がなくなってしまう。ワクチンをやめて大丈夫かという心配は根強か

ったが、すぐに飼料会社と協議して抗コ剤の添加試験を実施。衛生管理も進め良好な増体重を得た。育成率にも変化はなく、コクシジウム被害が増えた様子はなかった。

飼料中の微量要素の見直しも図る

そして、最初の7日間の生育が最も重要であることを考慮し、前期飼料の粒ぞろいを改善し、粉目を減らしてより食べやすくした。その結果、わずかだが成績が改善される傾向が認められた。

さらに、これらの経験を活かし、飼料中の微量要素についても最新の知見などを基に、三つめのトライアルとして見直した。アミノ酸は有効アミノ酸で管理して強化を図った上でMEも強化。

また、軟便を防ぐために比較的多めに配合されていた高価な魚粉も、他の地域の状況を参考にして減らし、飼料コストを最小限に食い止めることができた。

さらなる成績向上をめざして

大胆な飼料改革は、成績を急速に目標値に近づける結果となった。今後は、これまでの結果をまとめて飼料の内容を吟味するほか、空舎の持ち方や期間、その間の衛生対策や全体の作業を規定するローテーションなどにも目を向ける方針である。

ブロイラーの性能は日進月歩、その1日は人の1年にも匹敵する。鶏に負けないスピードで管理も試行錯誤、切磋琢磨で進歩しなければと関係者全員が気づく施策であった。

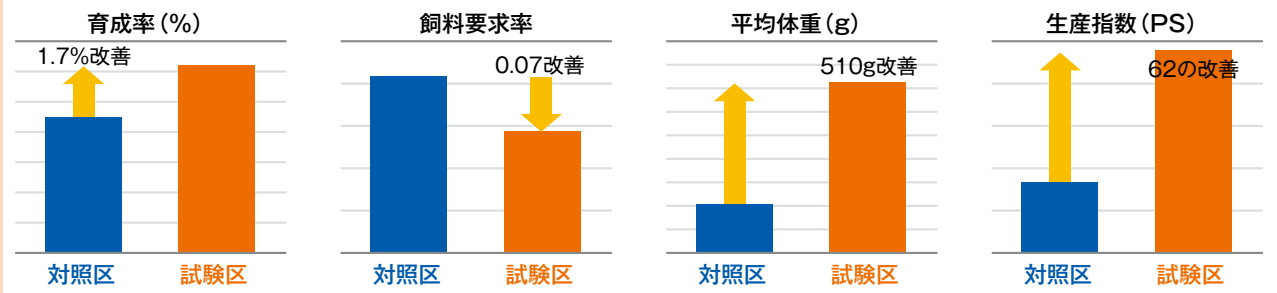
DATA 事業規模
所在地：近畿地方
出荷羽数：年間250万羽

改善が認められた比較試験

ワクチンと抗コ剤のそれぞれの効果には、農場ごとに差があります。異なる農場では同じ効果が得られない場合もありますので、事前に獣医師などの指導を十分に受けてください。

第1回試験

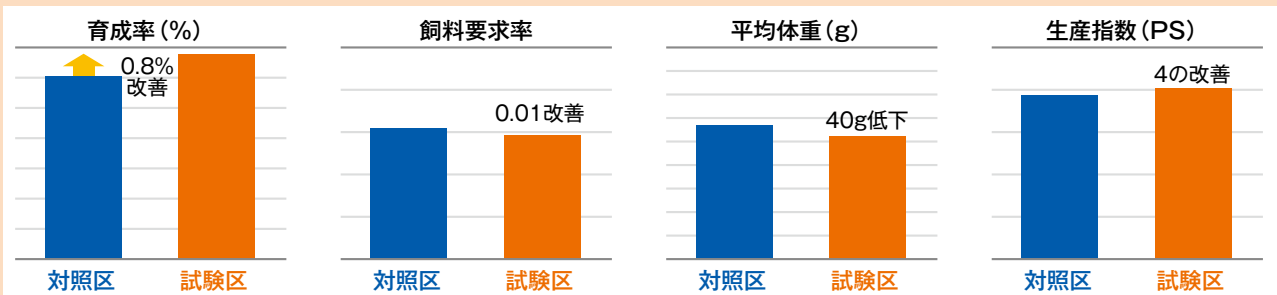
対照区では飼料に抗コ剤を添加せずにコクシジウムワクチンを使用、試験区ではコクシジウムワクチンを使用せずに抗コ剤を添加して空舎中の消毒なども工夫



出荷日令は51日でほぼ同じである。コクシジウムワクチンは、鶏にコクシジウムへの耐性を作るプラスの効果と、接種後の痛みなどによる若干のマイナスの影響があり、この差がワクチンの効果となる
衛生管理を進めると、抗コ剤を添加した試験区で、抗コ剤のもつ成長促進作用により、成績が大きく改善された

第2回試験

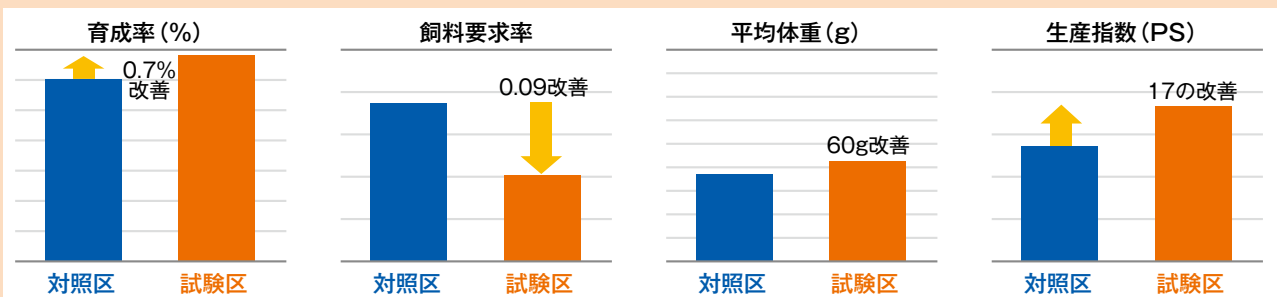
試験区では前期飼料の粒ぞろいを改善して粉目を減らした



出荷日令は50日でほぼ同じである。前期飼料の粒ぞろいを改善し、粉目を減らすと、わずかではあるが成績の改善の傾向が見られた

第3回試験

飼料全体の設計を見直し、試験区は飼料の粒度を粗くし、後期・仕上飼料のアミノ酸やミネラル、MEを強化した

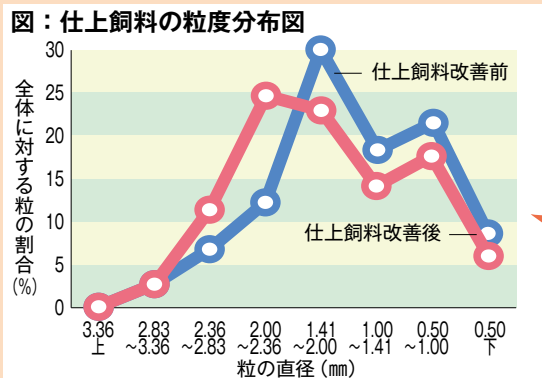


出荷日令は51日でほぼ同じである。成績の改善傾向が認められ、基本的な設計の重要性が改めてわかる

粒ぞろいの改良



前期飼料と仕上飼料での粒の違い



Point!

仕上飼料はトウモロコシのうち粗目に粉碎したものの割合を増やし、米は粉碎していない。その結果、飼料のなかの細かい粒が減り、粗めの粒の割合が増えた。ほかに、アミノ酸やMEの強化も行っている